

NEWS LETTER

No.13

2006.12

Graduate School of Education

(目次)

● 巻頭言

ランカスター大学心理学部と

教育学研究科との間で学術交流協定の調印 副研究科長 子安増生 2

● 研究ノート

教員から 心理臨床学講座 教授 岡田康伸 3

院生から 比較教育政策学講座 博士後期課程3年 石川裕之 3

院生から 教育方法学講座 博士後期課程1年 荘島幸子 4

● 社会人院生から . . . 教育科学専攻(専修コース) 修士課程1年 平井千晶 4

● 事務室から

教務掛の学生サービスについて 教務掛長 前田 勝 5

● 図書室から

図書室で働いています 図書掛 河野佳子 5

● 臨床教育実践研究センターから

. 臨床教育実践研究センター 外国人研究員(客員助教授) リース 滝 幸子 6

● 留学生から 生涯教育学講座 研究生 張 周周 6

● 諸記録 7~9

①入試結果 ②学位授与件数 ③人事異動 ④招へい外国人研究者等の記録

⑤寄附金受入 ⑥受託研究受入 ⑦オープンキャンパス2006開催

● 諸報 10

新人事務員紹介

訃報

巻頭言

副研究科長 子安増生

ランカスター大学心理学部と教育学研究科との間で学術交流協定の調印

2005年10月から私は、教育研究評議会評議員に加えて副研究科長を拝命しています。前平泰志副研究科長とともに、定期的に開催される「運営会議」などを通して、川崎良孝研究科長を補佐することが仕事です。

さて、その補佐的職務の一つとして、今回は2006年10月25日～26日に英国ランカスター大学で開催された「ランカスター大学-京都大学合同国際シンポジウム」に出席・発表するために教員4人（私のほかは齊藤智助教授、文学研究科の板倉昭二助教授、蘆田宏助教授）ならびに大学院生6人（教育学研究科4人、文学研究科2人）からなる訪問団を結成して出かけ、25日にランカスター大学心理学部と京都大学教育学研究科との間で学術交流協定書に調印したことをご紹介します。

ランカスター大学は、イングランド地方北西部の観光の名所「湖水地方（ザ・レイク・ディストリクト）」の入り口にあるランカスター市に1964年に設立された、イギリスでは新しいが大変活気のある大学です。ランカスターは、イングランド北東部のヨークと王権をめぐる「ばら戦争」を戦い、その勝利の結果、ヘンリー8世と娘のエリザベス女王を生み出した英国王室史でも最盛期のチューダー王朝を開いた歴史的由緒のあるところですが、ランカスターもヨークも、大学が設置されたのは1960年代になってからであり、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のような市街と一体化した大学と異なり、ともに郊外に広大なキャンパスを持っています。

ランカスターには空港がなく、今回は大阪発アムステルダム経由マンチェスター行きのKLMに乗り、マンチェスターからは先方が用意してくれたシャトルタクシーで大学のゲストハウスに直行という旅程でした。シンポジウム前日の24日は発表の練習日という予定でしたが、私の友人で共同研究者でもあるチャーリー・ルイス教授が自らマイクロバスを運転して湖水地方に半日案内というサプライズを用意してくれていました。お蔭で私にとっては12年ぶりのウィンドミア湖クルーズを楽しみ、ピーター・ラビットで知られるベアトリクス・ポッターの家（記念館）を訪問するこ

とことができました。その後大学に戻り、これまた旧知のギャヴィン・プレムナー教授の乳児心理学研究のための新しいラボラトリーを見学しました。

そして、いよいよ25日にはトム・オメロッド心理学部長と協定書に調印式です（写真）。シンポジウムの中でも申しましたが、ランカスター-京都リンクのはじまりは、1994年10月26日に当時文部省在外研究員でイギリスに滞在していた私がプレムナー教授のセミナーで研究発表をさせてもらったことがきっかけになり、途中のブランクを経て、21世紀COE経費などで教員・院生の派遣と招聘プログラムを積み重ねてきたことの延長線上にあります。近年はルイス教授と私、タウズ助教授と齊藤助教授が共同研究を実施しており、このような地道な努力の積み重ねによって大学間学術交流協定を結ぶに至ったものです。今後この協定をより実りのあるものにするために、教育学研究科の教員・大学院生の方々のご協力・参加をお願い申し上げて、簡単ですがご報告いたします。



調印式（左からメアリー・スミス科学・技術部門長、トム・オメロッド心理学部長、筆者、齊藤智助教授）

研 究 ノ ー ト

○ 教 員 か ら 反骨精神を忘れるな

心理臨床学講座 教授 岡 田 康 伸



2007年の3月31日で定年退職になるので、最後に会報に何か書いてほしいと言われ、引き受けてしまった。無事定年の日まで勤められればの話であるが、どうしてもお別れの挨拶になりそうだが、思いつくまに記述したい。

1988年にこの教育学部に勤めだして、いろいろな人に、教室の人たちや教育学部の他の分野の先生方に世話になってきていることに感謝していることを伝えたいと思う。特に、事務の人たちに感謝したい。迷惑をかけっぱなしだったなと思う。心理教育相談室に関わっていたので、クライアントが抗議に来たりした事もあったが、冷静に対応してくださり、すぐに我々関係者に連絡してもらえた。提出書類が遅れることもしばしばあったことを反省しているなど。退職することはなかなか難しいことで、しかも今は変化の大きなときだけに、この変化の流れがどうなっていくのかを見定めたい気持ちもあるからであろう。一番大きい変化はやはり大学の法人化であろう。法人化のよいところが今後現れてくことを願っている。こうした流れの中で、筋を通し、変に妥協することなく、今までの京都大学がもっていた良い反骨精神を忘れることなく、よりよい大学にしていってほしいものである。教育学部在籍中の個人的な思い出は多々あるが、そのなかでも心理教育相談室に関することにし少し触れておきたい。相談室が発展・拡張されていったのはうれしいことであった。この中で、規約上は京都大学に属しているように解釈できる位置づけであったのが、今は、教育学研究科の附属施設になり、少し残念な気がした。また、大学の方針で、西門の赤レンガにあった相談室が壊され、文学部東館に移ったこともショックであった。せっかく落ち着いた雰囲気がいまはなくなっているように感じるからである。いろいろな思い出を持って退職できるのは喜びであることを付け加えて終わりとしたい。

院 生 か ら○



比較教育政策学講座 博士後期課程3年

石 川 裕 之
(日本学術振興会特別研究員)

韓国ソウル大学の授業

私の研究テーマは才能教育です。才能教育とは、特定の領域(たとえば数学や物理など)において優れた能力を示す子どもに対し、その能力を最大限に伸長するためにおこなう特別な教育のことで、一般的には英才教育とも呼ばれます。私がフィールドとしている韓国はこの分野の研究で日本より一歩も二歩も先んじておりまして、大学でも才能教育に関する科目が正式に設置されていたりします。私は平成17年9月から1年間ソウル大学に留学する機会を得ましたが、その際に受講した授業について簡単に紹介したいと思います。

私が受講したのは「創造性と科学英才教育」という院生向けの半期の授業で、講師は才能教育をテーマにアメリカで博士学位をとられた新進気鋭の女性研究者でした。とても明朗快活な先生で、おかげでクラスの雰囲気は終始明るいものでした。受講生は33名で、やはり理数系教育の専攻に属する学生が大半でした(ちなみに外国人は私だけ)。授業は第7週まで才能教育の基礎理論に関する講義が続き、その後は学生による個人発表の時間に当てられました。中には才能教育機関の教員をしている社会人院生もいて、現場で実際に使用されている思考力テストを受講生に解かせてみたりと、興味深い発表を数多く聴くことができました。また多かれ少なかれ才能教育に関心をもつ人間が集まっているので、議論も活発に交わされていました。

私も日本の才能教育をテーマに発表させてもらったのですが、日本で公的な才能教育がほとんど実施されていないことについて皆一様に驚いておりました。なぜ日本のような科学技術立国が才能教育をおこなっていないのか、というのです。韓国では才能教育が国際競争力強化政策の一環として位置づけられているので、そうした疑問が出てくるのかもしれませんが。このように留学中は才能教育に関する授業を生まれて初めて受けることができ、とても楽しく貴重な経験をさせていただきました。

C 院 生 か ら

教育方法学講座 博士後期課程1年

莊 島 幸 子

(日本学術振興会特別研究員)



現在、私の研究生生活といえば、週末がやってくるたびに『声』を求めて、全国津々浦々飛び回っているというのが実際だ。私が出かけるその先にいつも待っているのは、生身の人間との出会いだ。彼らの『声』に耳を傾け、ときに自分も『声』を発し、身体丸ごとで対話を続けること。だから、週末はまさに真剣勝負なのだ。

「ぼく、実は性同一性障害者なんだ」。彼からのこの一言が、私を研究者としての行路へと導いてきたといっても過言ではない。当時大学4年生だった私は、目の前の女の子からの突然の告白に戸惑った。「『ぼく』って!?!」「性同一性障害ってなに?!」「近い未来、あなたが男性になるって一体どういうこと?どうやって?」…そこから、彼との長い付き合いが始まる。そして、それは私の人生そのものを決定付ける、ある種運命的ともいってよいような出会いだった。

これまで、性同一性障害に関する心理学的研究の多くは、当事者個人にのみ焦点をあて、さらに個人を発達段階に区切り、質問紙調査によって要素に分けていくものばかりだ。そこには、生きた人間の姿も生声もない。性同一性障害という障害ばかりが浮かび上がり、彼らと私たちの溝は深まるばかりのように思える。できればそこに、もう少し彼らの生命の息吹を、声を感じ取りたい。そこで、私は当事者のみならず当事者の家族の人生に寄り添う手法を取りはじめた。声は、単声から多声へ。語りは個人のモノローグから家族のダイアログへと厚みを増していく。そのとき、研究者自身も傍観者のままではおられず、容赦なしに巻き込まれていく。彼らが発する声は、他者と響き合うことに飢えているのだ。私は、研究者としてある前に一人の人であることを強く自覚しながら、当事者や家族と出会い、対話を続け、そして絡み合う声を紐解いていく。対話の先に、彼らの生きやすい世界が待っていることを願いつつ、明日も私は『声』を受け止めに外に歩み出さだろう。

■ 社 会 人 院 生 か ら ■



教育科学専攻
(専修コース) 修士課程1年

平 井 千 晶

私は大学卒業後、養護施設の児童相談員や児童相談所の嘱託相談員を経て、現在京都大学で養護施設児の愛着障害について学んでいます。養護施設で働いていた頃は、親と共に生活できない子どもの心理を理解することができず、参考にできる文献も多くはありませんでした。子どもの非行や正常ではない愛着行動に悩まされる毎日の中で、近隣の大学の先生が毎月ケースカンファレンスを開いてくださり、子どもへの関わり方についての的確で客観的な助言をくださいました。日頃の養護施設のミーティングでは上司の主観的な子どもの発達観が語られることもありましたが、大学の先生の意見は客観的で理論的であるばかりではなく、暖かい眼差しと感情を豊かに感じさせるものでした。大学の先生の助

言により私と子どもの相互性も硬直したものからより柔軟なものに変化させることができました。

現在大学院の授業で京都市の保育所を訪問していますが、私も保育士の方々に暖かな眼差しを寄せながらも客観的なアドバイスを、硬直しがちな体制を少し柔軟なものに変化させ、保育士の方々と子どもとの相互性が促進されることを願っています。

その他の大学院の授業でも、養護施設で働いていた頃に疑問に思っていた子どもの発達の捉え方や教育方法について詳細に学ぶことができ、大変充実しています。授業は20人くらいの編成なので、先生に直接質問できることが、大教室では味わえない恩恵です。また、京都大学の図書館は資料が充実しており、司書の方々も丁寧に教えてくださるので、調べることの面白みを実感することができました。教育学部の家族的な優しい雰囲気の中で、いろいろ困ったときに助けていただき、皆さんに感謝しています。

事務室から

教務掛の学生サービスについて

教務掛長 前田 勝



私たち教務掛事務職員は、事務職員の中では学生との接触が多く、事務職員が教育・研究支援職員として位置づけられている中で、主に学生の修学に関する支援（学生サービス）を行っている事務組織です。

最近では、特に法人化以降の業務量の増加により、徐々に学生サービスにかかる時間も減少しているのが実情であり、教務本来の仕事が疎かになりつつあるのではないかと危惧しています。

学生サービスの在り方については、「こうすることが学生にとって有益であろう」という大学側の一方的な考えによる学生サービスの在り方を見直し、「学生中心の大学」という観点から「学生の意見・要望」を積極的に採り入れることにより、学生のニーズに沿った、サービス機能の向上に努めることがより必要となってくると考えられます。

教務掛では、「学生の意見・要望」を採りあげることこそが学

生サービスの原点であるという認識に基づき、現在「教育学部の窓口対応に関するアンケート調査」を実施しているところです。

このような状況の中で教育学部では、11月から学生サービスの一環として、学生諸君からも要望のあったインターネットを利用した学生サービス『授業情報（休講情報、補講情報等）』について、学生掲示板の掲示と並行して教育学研究科・教育学部ホームページにも掲載することになりました。（学外（自宅等）からこのサービスを利用するためには、所定のIDおよびパスワードが必要になります。）

今後、教務掛としては可能な限り、「学生の意見・要望」を的確に把握し、学生のニーズに応えられるよう、より充実した質の高い学生サービスに努めていきたいと考えています。

図書室から

図書室で働いています

図書掛 河野 佳子



図書室で働き始めて、早いもので一年が経ちました。働き始めた頃は、仕事を覚えることだけに力が入ってしまっていたが、概ね一通りの業務内容を経験したことで、ようやく地に足をつけて仕事に取り組み始めたところです。

通常の業務は、購入依頼された書籍や図書掛で選書した書籍の発注・検収・支払、及び雑誌の配架等、和書の受入を担当しています。毎日様々な書籍が届き、自分の横に本を積み上げて仕事をする、こんなことも本が好きな私にとっては嬉しくて、読んでしまいたくなる衝動を抑えるのに苦労しています。利用頻度の高い雑誌などで、到着状況等の問い合わせもあるものについては、対応が出来るように目を通すように心掛けています。

週に一度昼休みの一時間、閲覧カウンターでの業務があり、主に貸出、返却の手続きを行っています。昼休みとはいえ、授業の合間を有効活用すべく、多くの利用者が来室されます。そんな中すぐに対応出来ずにお待たせすることもあると、申し訳なく思うことも度々あります。また、カウンターにいるとよく声を掛けられるので、利用者と図書室の厚い信頼があることがよくわかります。私が学生の頃は、司書の方に資料について相談をしたことも、

このように図書室を利用したこともありませんでした。こんな風に利用出来ていたら、と思うことが多くあるので、このことは本当に悔やまれます。昼休みの一時間ですが、今まで培っ

てこられた利用者と図書室の関係を壊さぬよう、利用者が気兼ねなく声をかけられるように笑顔で過ごすようにしています。

図書掛では、分からないことは何でも聞くことが出来、又、知りたいと思ったことを学ぶ機会を与えて頂き、支えてもらっています。毎日の仕事を積み重ねることで徐々に図書館員に近づいていけたら、と思っています。

これからもどうぞよろしくお願い致します。

臨床教育実践研究センターから



外国人研究員
(客員助教授)

リース 滝 幸子

もう早、京都に来て2ヶ月があっという間に経ってしまった。教えることへの不安はクラスがはじまってからは、みんなのお陰で薄らいでいきます。ところが、新たな不安がカンファレンスに座っている時にもやもやとどこからともなく湧きあがるのを感じ始めました。どうも、アカデミックを知らない世界で育った自分がいて、自意識過剰といった気分で「和」を乱さないよう心掛けている自分を感じています。40年近くも日本的な間や気配りから遠退いてきたからか、いま、そういう昔懐かしい感覚が、皆と一緒にいるうちに蘇って来たようです。芥川の【鼻】の主人公、禅智内供の鼻のように、以前馴染んだ感覚にほっとしながら、でも、侘しいような複雑な気持ちです。自分のありのままの姿で立ち現れるのは、怪物的な存在と感じられるので、これに適当なセリフを教え、衣装を着せる工夫が要るなって思っています。でも、それは箱庭療法の世界に自分をおいた時は違います。そこは自由に

自分の想いを語ることができるので、そのときを楽しみに待っているところです。

箱庭の世界も、京都大学では皆さんが基礎研究を多くされているので、世界のサンドプレー、国際サンドプレー学会ではそういった研究を待ち望んでいます。ぜひ、英語で発表してください。日本の箱庭療法学会誌では、臨床例が出されていますが、リサーチの論文も英文をつけてもらえると、世界の仲間が読んでくれます。アメリカではサンドプレーは臨床家のみが許されているので、開業の場でリサーチをすることは大変困難があります。それは、洋の東西を問わず共有される経験でしょう。でも、いま、アメリカの心理学者の中では、臨床の現場にある事例を集積的に見られるような質的リサーチの方法を提案している人もあります。

ところで、ここ2~3年のうちに、箱庭など、非言語の心理療法の心的外傷の対応に必要であると騒がれています。トラウマの研究で有名なvan der Kolk が“The Limits of Talk”という論文で言及しています。Neuropsychologyや脳の研究が盛んになったために、私なども今現在やっている箱庭を、そのアングルから見直して言語化できるところ、新しい発見があるかなって思い始めています。新しく開かれた窓から、新鮮な空気をいれて、見慣れた風景を眺め直してみるのもいいでしょう。

留学生から



生涯教育学講座
研究生

張 周 周

私は去年の九月に中国の上海からきた留学生です。卒論の資料を探す時、日本の「公民館」という言葉を知り、それをきっかけに生涯教育に興味をもち、特に、日本の生涯教育施設に関心を抱きました。そして、日本の生涯教育の実際を勉強するために、留学を決意しました。現在、私の研究テーマは中国の都市部における女性の生涯学習の現状と課題です。

月日のたつのは早いもので、私が日本に来てすでに一年になりました。この一年の間には、留学生活のつらさも深く感じましたが、それよりずっと多く体験したのは楽しさでした。私は勉強すると同時に、多くの日本人と交流することができ、その中で日本人の日常生活と考えを理解することができました。様々な体験を通じて、一般の日本人が一衣帯水の中国及び中国人に対し

て抱いている友好的な感情もしみじみ感じました。これは恐らくこの一年の中で私が受けた最も深い感銘だと思います。

そのような今日に至る留学生活の中で、私にとって、研究生として京都大学教育学研究科に受け入れられたことに勝るものはなかったと思います。ここでは先生方の学術への情熱と先輩たちの優しさが感じられ、教務掛や図書館などの職員の方たちの笑顔が見られます。

また生涯教育学講座の演習の授業には、院生の先輩たちだけでなく、科目等履修生など、年配の方もいます。さすが生涯教育だと思います。演習では、受講生や先生が発表者の論文やレポートに率直な意見を述べたり、年配の方が長年積んだ経験を私たちと共有したりします。授業を通して、自分の研究領域以外の知識が得られ、視野も広げることができています。

一つだけ、中国のように、すべての教室を自習室として自由に使うことができない点は残念ですが、私は教育学研究科の自由で厳格な学風の中で、今後とも色々なことを勉強し、吸収していきたいと思っています。

諸 記 録

◆平成19年度入試結果

・教育学部

日 程 等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前 期 日 程	40				
後 期 日 程	20				
第3年次編入学	10	30	29	10	

・教育学研究科

課 程 等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース 教育科学専攻	18			
	臨床教育学専攻	14			
	教育科学専攻(専修コース)	10	31	31	11
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	4	4	1
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)		4	8	8	4
博士後期課程編入学		若干名			

()内の数は外国人留学生で内数

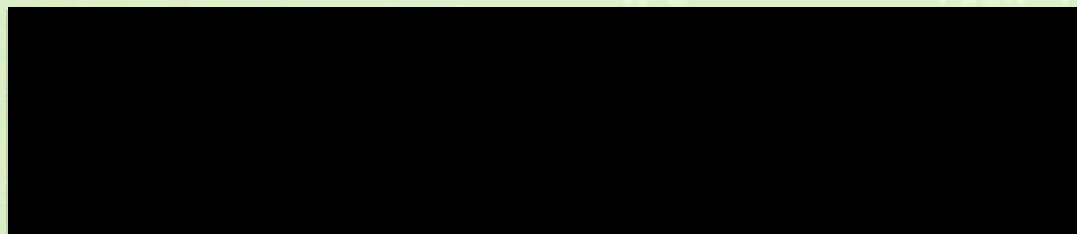
◆平成18年度学位授与件数

(H18.10.1現在)

学 位 名 等	授与者数
学士 教育科学科	
修士 教育科学専攻	
	臨床教育学専攻
博士 課程博士	
	論文博士 2



◆人事異動 (H18.04.02～H18.10.01)



◆ 招へい外国人研究者等の記録

外国人研究員（京都大学客員助教授）

- 氏 名 Reece, Sachiko Taki (リース, サチコ タキ)
 現 職 南カリフォルニア大学 ケック医学学校 臨床助教授
 研究課題 分析心理学の臨床と箱庭療法に関する研究
 所属講座 附属臨床教育実践研究センター 臨床心理実践学講座
 招へい期間 18. 9. 4 ~ 19. 2. 1

招へい外国人学者

- 氏 名 Standish, Paul (スタンディッシュ ホール)
 現 職 シェフィールド大学教育学部 教授
 活動内容 英米実践哲学及び日英比較教育研究
 受入講座 臨床教育学講座
 受入教員 齋藤 直子 助教授
 受入期間 18. 11. 22 ~ 18. 12. 21

外国人共同研究者

- 氏 名 巖 平 (ケン ペイ)
 現 職 日本学術振興会 外国人特別研究員
 活動内容 東アジアの教育近代化をめぐる「知」の交流：日本派遣中国人留学生の視点から
 受入講座 教育学講座
 受入教員 駒込 武 助教授
 受入期間 18. 9. 30 ~ 20. 9. 29

来 訪

- 機関名等 中国 首都師範大学（6名）
 来 訪 日 18.9.29
 ○ 機関名等 中国 北京師範大学教育学院（2名）
 来 訪 日 18.10.18 ~ 18. 10. 20



（北京師範大学 来訪風景）

《学術交流協定の締結》

- 10/25 ランカスター大学心理学部（英国）
 10/27 中央教育科学研究所（中国）

◆ 寄附金受入

寄附金の名称	寄 附 目 的	寄 附 者	研究担当者
スタンリー・カベルの「大人の教育としての哲学」：グローバル化の時代における異文化理解と市民性の教育のための実践哲学研究	ハーバード大学での会議開催及び発表	財団法人 カシオ科学振興財団	齋藤直子

◆受託研究受入

委託者	研 究 題 目	研究担当者
財団法人 こども未来財団	平成18年度 児童関連サービス調査研究等事業 「妊娠期における母親のアタッチメント表象が生後1年時の母子相互作用 及び子どもの社会情緒的発達に及ぼす影響」	遠 藤 利 彦
独立行政法人 日本学術振興会	平成18年度 研究成果の社会還元・普及事業（ひらめき☆ときめきサイエ ンス）～ようこそ大学の研究室～ KAKENHI「人はなぜプレゼントする のか ―絵本と物語を手がかりに人間を考えよう―」	矢 野 智 司
国立精神・ 神経センター	平成18年度 精神・神経疾患研究委託事業 「筋ジストロフィーの療養と自立支援のシステム構築に関する研究」	藤 原 勝 紀
文部科学省 初等中等教育局	新教育システム開発プログラム	高 見 茂

オープンキャンパス 2006開催

平成18年8月10日（木）、11日（金）の両日、「京都大学オープンキャンパス2006」が開催された。

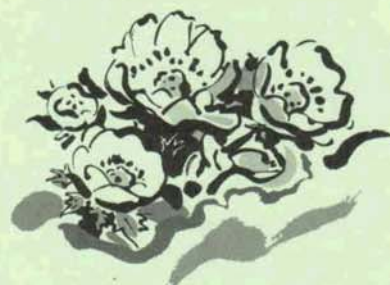
本学部においては、8月10日（木）12時30分から実施し、215名の参加者があった。

当日は、川崎良孝学部長の歓迎の挨拶、田中耕治教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員、教員、教務掛担当者が個別相談にあたり、参加者からは多数の相談が寄せられた。



（模擬授業風景）

諸 報



訃報



稲葉 宏雄 (京都大学名誉教授)

稲葉 宏雄 先生は、8月21日逝去された。
享年75歳。
昭和29年3月京都大学教育学部卒、京都女子大学講師、助教授、京都大学教育学部助教授を経て、昭和54年3月教授(教育課程)。
平成7年停年退官。
学問中心の教育課程、到達度評価の理論と実践、さらには近代日本の教育学の生成と発展に関して、優れた研究業績を残された。

～ 編集後記 ～

今回のニュースレターは、今年度において2回目のものである。現在、教育学研究科はイニシアティブやCOE関連などの事業があり、従来の大学運営のあり方自体が、各研究科で変化しつつある。従来言われている大学としての仕事の多様化と困難さは、もう皆が認めるところとなった。しかし、教育学研究科にとっても今厳しい状況ではあるが、だからこそその興味深い研究や教育が却ってできるのではないかと思う。また学校や社会における教育問題に関して難問が山積みではあるが、それらの問題に取り組む組織力を、教育学研究科は備えている。教育、研究そして実践において、よき指導者が育つ土壌をさらに整えることが更なる目標となるであろう。

(Y・K記)



京都大学教育学研究科 ・ 教育学部広報委員会

- 委員長 稲垣 恭子 教授(教育社会学講座)
委員 川崎 良孝 教授(教育学研究科長・教育学部長)
委員 鈴木 晶子 教授(教育学講座)
委員 角野 善宏 助教授(附属臨床教育実践研究センター)
委員 千代 進一 事務長
委員 新堂 利博 総務掛長
委員 前田 勝 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075 (753) 3003

表紙デザイン 山田旬子